

「介護・福祉施設で働く 看護職のエピソード」集



「介護・福祉施設で働く 看護職のエピソード」集

発行にあたって

公益社団法人 岡山県看護協会
会長 宮田 明美

2025年に向けて、少子超高齢化社会の中で看護の力を発揮するために、日本看護協会はステートメントを発表しました。そこには、「暮らし」というフィールドに立ち、これまでなかった看護の力を現実させなければなりません」と表現されています。今まで、私たちの多くが病院での看護を実践してきました。そして、これからは地域、介護福祉施設でも看護の力が必要とされています。

介護福祉施設は主に高齢者等の生活の場であるために、病院のように設備や環境が整っていませんし、医

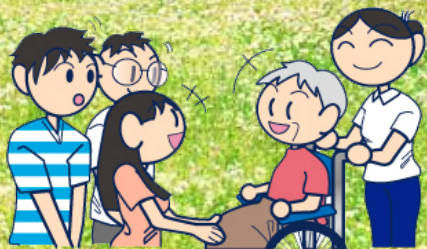
師が常駐しているわけでもありません。介護職やりハビリ職など他職種と連携して働いていかなければならないので、ひとりの看護職員の責任や負担が大きくなる可能性があります。

岡山県ナースセンターは、看護職が介護福祉施設でやりがいを持つて働き続けられるために、介護保険制度や介護福祉施設での看護の役割についての研修会を開催したり、施設の情報を提供したりしてきました。また、希望する人には職場体験をしてもらいながら、個別に就業相談、就業後も支援を継続することに取り

組んでいます。そして、今回は、実際に働いている看護職に、介護福祉施設での看護の魅力を、それぞれが体験したエピソードを通して表現してもらいました。「暮らし」「生きること」のすぐそばにいるからこそ感じられること、看護の本質に触れた喜びなどが綴られています。貴重な体験を表現していただき心より感謝申し上げます。そして、寄せられたエピソードを読むことにより、介護福祉施設での看護のやりがいや喜びを感じとっていただき、「働いてみたい」と関心を持っていただくことを願っています。

目次

● 子育てと仕事の両立を実践しています	岡田 美奈子	4
● 想いは通じる	菊井 由香	5
● 父を思う	北村 和恵	6
● ひとりじゃない	小松崎 有美	7
● 尖足の利用者への関わりを通して	小山一恵	8
● 最後の焼き肉	佐藤 恵子	9
● 紅色に輝く生きてきた証	高本 美恵子	10
● 特養で看護師として働いて良かったこと	田中 聖子	11
● ジュースのかけら	濱本 ひとみ	12
● ユマニチュード	原田 みどり	13
● やりがいのある職場	平谷 のり子	14
● 最後まで自分らしく生きる …利用者さんに教えてもらったこと…	松本 裕美	15
● A氏の生きがいを支える	藤原 正美	16



挿絵 作者：山川 美恵子

子育てと仕事の両立を実践しています

岡田 美奈子

私は、子どもが10ヶ月になった時、介護老人保健施設（老健施設）に就職しました。子育ても老健施設での勤務も初めての経験でした。病院勤務しか経験していない私が老健施設で務まるのか、子育てと両立しながら働けるのかとても不安でした。しかし、夜勤がなく、日勤だけでも正社員として働けるということがこの施設を選択した決め手になりました。

仕事にも慣れ始めた時に、子供がアデノウイルスに感染してしまい看病で休んでいるときに、私までアデノウイルスに罹患し、結膜炎まで発症し、5日間も休んでしまいました。私自身も39度の発熱があり、出勤で

きないのはわかっていましたが、職場の仲間に申し訳ない気持ちでいっぱいでした。職場の上司は「子どもが病気になるのは当たり前、子どもから病気をもらうのも当たり前」と言ってくれました。勤務制度だけでなく、上司や職場の理解や支援に助けられています。勤務時間が終了すると、「はい、時間ですよ。お子さんのお迎えに行つてあげて。待っているよ」と、気持ちよく優先的に帰らせていただいています。とても恵まれた環境にいることに感謝しています。

ここでは毎月行事があり、スタッフ皆が協力して準備をし、利用者さんと一緒に楽しむことができます。



この法人の理念である「皆に優しく、ともに楽しく」がまさに実践されていることを実感できています。子供がいても働きやすいと思えるよう、私の子どもが大きくなったら、今度は小さい子どもを持つスタッフのサポートをしていきたいと思っています。

想いは通じる

菊井 由香

看護師となり病院勤務を数年経たのち、患者さんとの関わりを深く持つてみたいという思いがふくらみデイサービスで働くことを選択しました。

その施設は開設準備からの勤務でしたので、未経験な私は全てに於いて指導を受ける状況でしたが、スタート時には職員同士の連帯感も生まれたと実感するようになりました。

開設初日の記憶も定かではないですが、日を追う毎に徐々に慣れ、利用者との会話も楽しめるようになりました。そんな中、無口ですが、いつも寂しそうな表情をし、外に出ようとする男性がおられました。ふと気がつくとき玄関に向かわれ職員の

説得で戻る…を繰り返されることが多くありました。

ある日、他の利用者の足浴をしていると、その方が傍にこれ興味深そうに見られていたので「〇〇さんもしてみますか？」と話しかけると頷かれたのです。

それまでは入浴もカラスの行水程度の方でしたので、その反応は予想外でしたが、早速用意し、お湯に足をつけマッサージなどをするとう「気持ちいいのう」と話してくれるようになりました。それから、自分からは言われませんでしたがお誘いすると断られることなく、時に準備も手伝ってくださるようになりました。少しずつ話すうちに、どうして外

に出ようとされるのかわかるようになりしました。その方は夫婦で入所されていたのですが、デイサービス利用前に奥様を亡くされておられたのです。その奥様との思い出深い自宅に戻りたかったことがわかり、今までの行動が納得できるようになりました。

ただ、「この人は認知症」だからと否定的に見るのではなく、其々の行動や言動には意味や感情があるものなのだと考えさせられる出来事でした。

「この人はこうだから…」と決めつけることなく、広い視野で接することの重要性を痛感し、仕事だけではなく色々な場面でもこの経験を思い出すようにしています。

父を想う

私の職場は、療養型介護老人保健施設である。入所者は要介護5もしくは4で、意思伝達・経口摂取・体動困難な寝たきりの方が多い。

先日、80歳男性のI氏が入所された。昼夜を問わず大声で「おーい、おーい」と呼ぶため訪問するが「呼んでない」と答え、又すぐに「おーい、おーい」を繰り返す。そして今度は障害のある一人娘の名前を呼び続ける。ある日、夜勤帯で、いつものように「おーい、おーい、Y、Y」と娘を一生懸命に呼び始めた。「Yさんはもう寝とられるよ。Iさんも寝ましょう」と声をかけるが、「ご飯は食べたじやろうか。何か困っちゃおらんדרוךか。車を呼んでく

北村 和恵

れ。行かにはあいいけん」と繰り返す。声が枯れ、疲れ果てるまで言い続けて朝方やっと眠る。娘の名前を呼び続けるI氏の姿に私は自分の父を重ねてしまう。認知症を発症し3年目。誤嚥性肺炎を繰り返し活動性も徐々に低下、発語も殆どなく、2か月前からは、一人娘の私の名前を呼ぶこともなくなった。領き等の意思表示はまだできるが、私が誰だかわからないときもある。父が私のことが分からない、名前が呼べなくなるなど考えたこともなかった。そして変わりゆく姿が辛く寂しさがこみ上げる。I氏に名前を呼ばれ心配されているYさんが羨ましい。親としてのIさんの思いや二人がどんなに

ひとりじゃない

小松崎 有美

「なんでここで看護師してるの」特養に勤めて最初の年、友人が私に言った。「1日でも長く生きて欲しいから」私はこう答えた。確かにこう言った。しかし現実とは違った。

私が接するご利用者は、ほとんどがターミナル期の方だった。身寄りもない、返答もない、回復の兆しもない。ただ微かに息だけはある。私はその息をつなぐことが切なくなつた。何もできない自分への苛立ち。何も変えられない環境へのもどかしさ。看取ったベッド際でひたすら泣いた。もう辞めよう。私には合わない。そう思った矢先、看取りを終えた部屋に後見人と名乗る方が現れた。

最期を看取ったのは私だけ。なんだか申し訳ない気持ちでいっぱいになった。でもそのときだ。「よかった。ひとりじゃなくて」その言葉にハッとした。ひとりじゃない。片親で育つた私には痛いほどわかった。ひとりぼっちのつらさ。そのつらさを埋めてくれた母の愛。ひとりじゃない、これは最大級の幸せなのかもしれない。

今もそうだ。職場に行きたい、それはご利用者がいるから。家に帰りたい、それは家族が待っているから。ひとりじゃないのは幸せなこと。そう思った私は、それから五年働いた。「まだそこで働いてるの」と言われるし、ここまで働ける自分にも驚

いている。でもこう答えることにしている。「何かできなくても最期一緒についてあげたいからさ」と。私が寄り添うその最期。「お疲れ様でした」とかける言葉。今ではつらさより尊さが上回っている。



尖足の利用者への関わりを通して

小山 一恵

医療の現場から介護の現場に移動して、看護の視点の変化に戸惑いながら6年が過ぎました。今年度の診療報酬・介護報酬同時改定により、在宅復帰への関わりが増えてきた中でスタッフと共に驚き、喜んだエピソードを紹介します。

平成27年に交通事故に遭い、自宅で閉じこもり生活になり、平成28年8月頃意識障害にて入院。そして、ADLが低下し2年以上寝たきりの生活で下肢尖足状態になった方が病院から入所しました。誰もが在宅は無理だろうと思いましたが、しかし利用者の「足を少しでも動かせるようにしたい。できれば自宅への生活に戻りたい」という思いを聞き、可

能性は低いが本人の希望に沿うよう頑張ってみることにしました。入所当日から利用者自身もリハビリに積極的に取り組む、時間があると自己訓練を行っている姿をよく見ました。利用者への励ましや日常生活の中で残存能力を活かした援助を行い、ADLの変化、特に足関節の変化は見逃さず、声をかけるよう心がけました。

「だいぶ関節が柔らかくなって曲がるようになってきましたね」「そうじゃる。ここまで曲がるようになってきたんですよ。痛くはないよ。膝も少し曲がるようになったし：嬉しいんよ」満面の笑みで答えてくれました。この笑顔に癒され、仕事への

活力になっていいると思います。

2カ月が過ぎた頃に平行棒内を5メートル歩行でき、在宅復帰は夢ではないことを実感し、驚きと喜びで次の目標が出来ました。諦めると終わることも、諦めなければ出来る事もある。この事例から実感しました。行事や食事会、旅行などでスタッフ同士の親睦を深め、仕事では意見を出し合い連携し、利用者に向き合っていく、そんな職場です。仕事なのでつらい事がありますが、利用者の笑顔に支えられて今の自分が形成されているんだと思います。

最後の焼き肉

佐藤 恵子

パーキンソン病が進行し、あなたは毎日、食事をするのが苦痛なほど嚥下力が落ちていましたね。施設から提供されるお食事は、ペースト食で見た目の食欲さえわかないものでした。徐々に、食事の摂取量が減少し、体力が落ちていく中、あなたとご家族は、施設での最期を選択なさいました。私たち、施設の職員は、食べることに喜びを持たなくなっているあなたに何か笑顔で食事をしてもらう機会を持ってほしいと思いました。「何か食べたいものはない？」私たちの問いかけに対して、あなたから帰ってきた返事に私たちは、あつと度肝を抜かれましたよ。

「焼肉が食べたいよ」

その言葉を聞いて、私たちは、看護

師だけではなく、栄養士、介護士、リハビリのみんなであなただの願いをかなえるために、考えました。肉は、極上で口の中に入れたら脂がとろけるようになしゃぶしゃぶ用の薄い肉を買おう。せっかくのごちそうだから、ご家族も一緒に食べて頂こう。みんなで食べるおいしいから、職員も一緒に食べよう。焼き肉のたれはどれが好きか、もう一度、好みを聞いてみよう。場所は居室では味気ない。海が見える、最上階のティールームで食べよう。

焼き肉の日は朝から、ご家族と一緒に準備し、昼にあなたと一緒にみんなで焼き肉を焼いて食べましたね。喉に詰まりはしないか、飲みこめなかったら悲しいな。でも口に入れるだけでも

味わえるかも。いろんな職員側の心配をよそに、あなたは、肉を食して笑顔で「美味しいね」と言いましたね。数口しか、飲みこめなかったけれど、満足そうなおあなたの笑顔を見て娘さんが言いました。

「好きなものを食べて、それが詰まって死んだとしても幸せだわ。この施設で最期を迎えられてよかった」

この日を境に、私は思いました。介護施設の看護師の喜びはここに。最期まで【生きる】を支える【優先する】のは、治療やリスクではなく、本人やご家族の思いと生活の質。

ほどなくして、娘さんと私が手を握る中で穏やかに逝ったあなた。天国で焼き肉を思いっきり食べていますか？

くれないろ
紅色に輝く生きてきた証

高本 美恵子

「おはよう」施設の朝は早い。午前四時半頃から一人、二人とデイルームに集まって来る。まだ早いから寝ましよう。と言うスタッフはいない。起床も就寝も一人一人生活習慣が異なるのは当たり前と捉えている。そう、ここは生活の場であり、家庭と同じ場所である。それが老人福祉施設だ。

「おはようございます」朝、出勤と共に全てのユニット、フロアを廻り利用者に声を掛ける。これが私の1日の始まりである。返事が返る方、うっとおしいと言わんばかりの表情の方、思わず手を振り上げる方など様々である。一人一人のその反応で体調を把握する。

肌の状態、声の調子、活気、表情からフィジカルアセスメントを行っている。これこそが看護の基本だと思っている。自ら望んで入所される方はいない。突然の脳疾患や認知症により在宅での生活が困難となった方が殆どである。

住み慣れた我が家から突然環境が変わり、混乱される方、自分の思いや苦痛がうまく表現できない方、思うように動かない体に涙する方も多い。そういった方々の思いを汲み取るうと日々その立場になって考え、医療面で支えていく。今できる事、今したいこと、これからしたいことが叶えられるよう看護師は、疾患のリスクや安全面を考え支えていく。

希望に添えた時の喜びは一緒になつて涙することも度々である。「できた、すごい」と握ったその手には、幾つもの深く重なったシワと少し変形した指の関節が虹色に輝いている。其の方の生きてきた証がそこにある。

施設の看護は医療だけでない。施設は一人一人の人生に大きく係わる最高の看護実践の場所である。

「おはようございます」新しい一日が今日も始まる。

特養で看護師として働いて良かったこと 田中 聖子

特別養護老人ホームで働き始めて13年目を迎えています。今では仕事や環境に慣れてドンと構えているように見えますが、働き始めた頃は右も左も分からないまま高齢者施設の門を開け、ただひたすら先輩の仕事を見よう見まねで行う毎日に、不安という言葉しかありませんでした。

そんな状況で毎日の業務を送っていたある日、一人の利用者がポツリと、「あなたの笑顔良いわー」と、私に言っ下さいました。その一言が、何げない一言が私の心にグッと来たのです。当時、不安で仕方なかった私が、その言葉で救われたのを今でも忘れられません。

特養では病院と違って医師が常駐

していません。そのような現場で看護師として働く上では、自分たちで判断できる技術や経験も問われます。一分一秒を争う事もあります。他の事業所で働くほうが楽かもしれないと思う時もあります。ただ、なぜ私が施設で看護師として働くことを選んだのか。

介護の現場は毎日同じことをしています。ご利用者の食事・排泄・入浴・更衣介助。このような、私達からしたら日々同じことの繰り返しのように思えることが、ご利用者にとってはかけがえのない残された時間である。その中で、一人一人の生活を支えながら共に歩み、楽しみ、何げない日でも笑って過ごせられるように

サポートすることが、私にとってのやりがいなのではないかと思っただけです。

そして、人生最後の安らげる場所として、その人の最期に向き合えることの出来る仕事として、施設で看護師として笑顔を絶やさないように働けていて良かったと思います。



ジュースのかけら

濱本ひとみ

平成30年11月に倉敷市大高地区にオープンした小規模多機能サービスで看護師をしています。

先日、利用者様が私のことを「はまちゃん」と呼びかけてくださいました。この一言で少しほっとした私がいまいた。オープンしたばかりの事業所ということで気負っていた部分もあったようですが、利用者様や介護士さんたちと一緒に、施設の文化を作っていくたいと思っています。

今回ご紹介するのは、異動前に勤務していた特別養護老人ホームでのエピソードです。

「Aさん、どう？今日はリングよ」

看取り期に入ったAさんの食事介助は、主には言語聴覚士を中心としたリハビリスタッフが担当していましたが、看護師の私も何度か携わらせていただきました。

食事介助と言っても、凍らせたジュースの小さなかけらをそっと口に含ませるのみです。ご家族からの要望とはいえ、Aさんにとって誤嚥の危険をはらんでいるということ、誰の目から見ても明らかでした。

私が介助をしている時、出勤してきた介護士さんが訪れ、Aさんに「おはようございます」と声を掛けます。そっと触れながら「今日は何味ですか？」「冷たいですね」など話しかけていました。日を追うごとに、反応が弱くなってきました。ご家族が話しかけても目が開かず、声を出してくれることも少なくなってしまうれました。それでも、私たちスタッフはいつもどおりにジュースのかけらをすすめ、そしてご家族もしきりに話しかけていました。それは、Aさんの最期の日まで続いた光景でした。これまでの経験上、いくらご家族か

らの希望とはいえ看取り期に入った方が経口摂取するというのはあり得ないことでした。医師が、ご家族に状態を伝え、私たち看護師は点滴をするというのが一般的な病院での最期の迎え方でした。

Aさんの最期に携わらせていただき、「これが本来の人間の亡くなり方ではないか」と、改めて考えさせられました。ご自宅ではなく特養であったという選いだけで、食べられなくなったから亡くなるという、昔ながらの最期の迎え方であったと感じました。

医療が進歩し、ご家族も選択をせまられることが多くなっていると思えます。そんな中、「最期まで楽しみを感じてもらいたい」というご家族の意向に寄り添うことができる場所に、生活の場としての特養の存在を見出しました。

ユマニチュード

原田みどり

私が勤務しているのは介護療養型老人保健施設だ。施設とは言っても経口摂取できる人は居らず経管栄養か点滴だ。会話らしい会話ができるのは二、三人だろうか。

最近、病院から八十過ぎの男性が入所となった。既往症は脳梗塞後遺症、肺炎、高血圧他レビンが入っており抜去予防にミトンを装着していた。理学療法の経過報告書にはコミュニケーションは不良で追視があるときがあると書かれていた。毎日のようにご家族の面会があり、ベッドサイドには小さなラジカセと演歌歌手のカセットテープが置いてあった。

声かけに追視はあったがはつきり

しなかった。

そして静かに痰を溜めている油断ならない人だ。

ある日何か話しような眼に見える。「○○さん」「はい」「えっ喋れる？」

その日から毎回目の前で話しかけてみた。毎回ではないが返事が短く返ってくる。「痛いところはありますか」「ある」「痛い」「どこですか」「あ、おとお」文章は無理だった。眼が以前より生き生きしている。

話せるようになったのは偶然機能回復の時期だったのか、それとも今まで本人が諦めていたのだろうか。その前に私たちが諦めていたのだろうか。

反応が乏しい人も多い中で返事が

返ってくるのは嬉しい。小さな喜びがモチベーションを上げてくれる。ご家族も笑顔が増えた気がする。今日の会話は「大丈夫ですか」「大丈夫だろう」だった。



やりがいのある職場

平谷のり子

私は、介護付き有料老人ホームで勤務し十年の節目の年になります。当施設では、看護職・管理者として奮闘する日々です。

介護施設に入ったきっかけは、看護師としての経験を活かし、人の役に立ちたいという思いからでした。現在の施設で勤務することになりましたが、当初は看護師として何を行えばよいのか戸惑う毎日でした。

そんな時、地域医療を熱心に取り組んでおられる先生方にお逢いすることで施設での穏やかな看取りについて考える様になりました。

そこで、施設での看取りを実践するために施設内での内部研修やオンライン体制の構築・看取り加算の申

請等の施設内の体制構築に力を入れました。そしてスタッフ共に入居から最期の瞬間まで関わりたいという気持ちで入居者様・ご家族に寄り添うことで双方の信頼関係を作りました。

また、それぞれの主治医の先生方のご指導の下、医療が中心ではなく自然体での終末期を援助することができるよう多職種連携を図りました。そうして十年で約五十以上の看取り体験を致しました。

これまで、誰一人として同じ終末期、その瞬間はありませんでした。「働き方が生き様」「生き様が死に様」その方の人柄が現れることを実感しています。

これからも、一期一会を大切に、今自分にできることを真心こめて実践します。

最後に、看取りを行った娘様からの言葉を紹介します。「この施設での理想の看取りをして頂き後悔は一つもありませんでした。縁があり、この施設に入居できたことが母にとって最高の幸せな事でした」と話して下さいました。

この最高の言葉を胸に、更にやりがいを感じています。今後も看護職として精進して参ります。

最後まで自分らしく生きる・・・ 利用者さんに教えてもらったこと

松本裕美

再婚した夫の連れ子3人を育てたSさん。本人の気難しい性格から次男以外の子どもとは関係がよくなかったが夫や次男と漁業を営み、孫娘をたいへん可愛がった。夫亡き後、変形性膝関節症が悪化し養護老人ホーム入所、その後、平成24年に当特養に入所となった。

当時は寝たきりで意思表示せず筆談。入所後は反応のある話を職員間で情報交換、頻回に声掛けし細やかな関わりを心がけた。徐々に心を開き笑顔や発語も出て時には冗談も言うようになった。特に牡蠣打ちの仕事や地元の島や船の話はじつと聞いていた。

27年1月誤嚥性肺炎で2度入院。ミキサー食やゼリー中心になり、3月には著しい浮腫と傾眠気味になる。4月「島と本土が橋でつながったよ」の声か

「橋を渡らせてあげたい」の思いが大きくなった。5月、食事を4回に増やしゆっくり個別対応。誤嚥を繰り返さないために口を湿らせる程度から最小限のエネルギー、水分摂取できるよう職員間で共有し明るい声かけを続けた。「食事以外にしてあげられることは？幸せを感じてもらえることは？」と考える日々。

6月、主治医、次男と相談し、ついに外出決行。橋のたもとで家族6人と合流し車内で数年ぶりの再会を喜ぶ。孫娘を見た時には小さな目が開きなんとも嬉しそうなお顔。牡蠣小屋や海を眺め、自宅に立ち寄ると近所の方が窓を叩き話しかけてくれた。何か言いたそうだが言葉にはならない。が、感動が伝わる。出発時に低かった酸素飽和度が家族と会う頃には安定し外出中は穏

やかに過ごせた。帰って1時間後に急変し受診。駆けつけた次男は本人の耳元で「もう頑張らんでええで、今日は行きたいところに行つたら、思い残すことはなかる」ふんわりした温かい言葉だった。

7月永眠。次男から「自分たちの勝手で養護に入れたことを後悔してた。ここでは寝たきりだったのが車椅子になり話も出来るようになった。自分たちが長年してあげたかったことを叶えられた。気持ちがお楽になり、母にお詫びができ感謝しています」と言われた。私たちの仕事は他の職場ではできない体験ができる。人の最後に関わる仕事だから。これからもその人らしい最後が迎えられるよう関わっていききたい。そんな素晴らしい仕事に携わっている自分たちに誇りを持って頑張りたい。

研修先(介護・福祉施設)で働いている看護師さんのコメント

平成 29 年度から看護職の介護福祉施設への就業支援事業の一環で、介護・福祉施設での「看護職の職場体験研修」を開催しています。研修を受け入れてくださった多くの施設に感謝申し上げます。

また研修中は、施設の方々大変お世話になり誠に有り難うございました。ナースセンター職員の施設訪問の際には、現場の看護師さんが、介護・福祉施設で働く看護職の魅力や思いをいきいきと語ってくださいました。一部を皆様にお伝えします。

介護度の高い方が、デイケアに来られて他の利用者さんと関わられている。そのことは大切なことで、そこでは看護師の必要性を感じる。

デイケアでは、日々通所されていて元気になられて行く様子がうれしい。

外出・外泊困難な患者さんに、計画を立て、皆の協力のもと外泊できた。

病院と違って、自分で判断して行動しないといけないという不安はあるが、患者さんの希望に沿った看護ができる。誤嚥の可能性がある患者さん。本人の「食べたい」という希望もあり、話し合いの結果、口腔管理を行いながら、希望の食事を少し食べていただき喜んでくれた。

デイケアで、毎日利用者さんと顔を合わせている中で、ちょっとした変化に気づくことがある。脳梗塞の徴候の察知や、胸部違和感から病院受診を勧め大事に至らなかった。

看護師 1~2 人で勤務しているが、他の職種の方や、管理者の協力があり安心できる。



老健施設は、複数の看護師がいるので、相談する看護師がいて安心できる。

入所者一人ひとりの望みや生きがいを家族のように一番近くでサポートしているのが介護員です。今回入所者の、夏祭りやぐらに上がり太鼓を叩きたいという願いを、看護師を含めた多職種で協働し実現しました。その人の生きがいを支えることに価値を見いだしたこの過程(プロセス)に感銘を受けたので紹介します。

岡内淑

A氏の生きがいを支える

藤原 正美

腰椎脊柱管狭窄症とアルツハイマー認知症と診断された A さん。明るく社交的で負けん気の強い性格で、身体的機能の衰えは本人も感じているが、自分で出来るという意識込みは強く、毎年夏祭りで舞台上に上がり太鼓を叩くという役割を、60 年間ずっと持ち続けていた。しかし、私を含め周囲の反応は、A さんの身体的状態だけを見て、舞台上上がることは無理だろうと否定的だった。

ある時 A さんとの会話の中で、「舞台上上がり自分の叩く太鼓で皆が楽しく踊っている姿を見るのが楽しい」と、太鼓を叩くために舞台上がらなければ得られない、そのことを生きがいに感じている A さんの思いを知る事が出来た。A さんが生きがいを持ち続けることができるように、病棟スタッフ・リハビリ担当者・太鼓ボランティアと合同カンファレンスの機会を設け、現状の問題と対応について情報を共有し支援した。そして、無事に舞台上で太鼓を叩くことが出来た。

夏祭りの翌日 A さんに「昨日は太鼓よかったよ」と声掛けすると「そうか?」と何事もなかったかのよう

に平穏な口ぶりで答えた。そのようないつもと変わらない A さんの様子にこちらも自然に笑顔になった。

舞台上に上がり太鼓を叩くことは、私たちには大きな問題でも、A さんにとっては習慣行事、即ち生きがいであった。認知機能や ADL の低下により日々の習慣行事を続けていくことが困難な状態となっているが、毎日同じ事が同じように続けられるよう支援することが、その人の生きがいを支える事なのだ、私達は A さんから教わった。

復職のための講習会・研修会

再就職に向けて最新の看護の知識や技術を講義や演習を通してを学べます。
受講料は無料です。

●看護技術に不安がある人

2019年度 定例看護技術講習会

毎月第1金曜日と第3金曜日(ただし、5月と1月は第3金曜日のみ、3月は第1金曜日のみ) 9:30~15:45

	日時	内容(講義と演習)	定員
第1 金曜日	4月、7月、10月、 12月、3月	フィジカルアセスメント、急変時の対応(AEDの使用含)	15人
	6月	看護の動向、看護倫理、薬剤の知識、施設紹介(講義のみ)	40人
	8月、11月	最近の医療と看護の役割、看護記録、リスクマネジメント、感染管理(講義のみ)	40人
	9月、2月	スキンケア(褥瘡・ストーマ含)、経管栄養法、体位変換、移乗	15人
第3 金曜日	毎月 (3月除く)	注射、採血、輸液・シリンジポンプの取扱い、吸引処置、 口腔ケア、心電図のとり方、導尿、意見交換会	15人

●地域での看護を目指したい人

訪問看護師養成講習会 開催/5月~9月 週2回程度 合計30日間

講義 演習	在宅における看護、ケアプロセス、緩和ケア、 フィジカルアセスメント、リハビリテーション 他
実習	訪問看護ステーション、病院(合計5日間)

編集にあたって

「介護・福祉施設で働く看護職のエピソード」集を発行するに当たり、ご協力くださいました皆様
に、心より感謝申し上げます。

平成29年度から看護職の介護施設等への就業支援事業に携わって、多くのことを学ばせて
いただきました。特に、どこの介護・福祉施設の方々も喜びや苦勞を感じながら、職員皆で一致団結し
利用者さんに寄り添っておられます。そのことが、利用者さんやご家族の心の支えとなり、看護師のや
りがいにつながっていることを実感しました。

編集に当たり、挿絵のご協力もあり、より表現が豊かに感じられたものになっております。なお、作
品におきましては、投稿者の意思を尊重し、なるべく原文のまま表現させていただいております。
至らないことも多々ありましたが、皆様のご協力もあり無事発行することができました。誠に有難うご
ざいました。次号も、暖かく見守っていただけると嬉しく思います。

編集委員より

岡山県ナースセンター(看護職のための無料職業紹介所)

ナースセンターの紹介

- 法律(看護師等の人材確保の促進に関する法律)に基づいて、各都道府県に設置されています。
- 岡山県ナースセンターは、岡山県知事の指定を受けて、岡山県看護協会が運営しています。
- 主な事業
 - 看護職の無料職業紹介
 - 復職のための講習会・研修会
 - 「看護の心」普及事業

岡山県ナースセンターは、看護職の就業相談などを通して、看護職の皆さまの結婚・出産・子育て
など、ライフステージに沿って復職・転職・スキルアップなど生涯にわたってサポートします。(相談内
容や、個人情報の守秘義務は厳守します)

就業相談

無料職業紹介サイトeナースセンターを利用して看護職の相談員があなたに合った職場と一緒に
探します。仕事上の悩み相談も受けています。

- 来所相談 月曜日~金曜日(9:00~16:00)
- メール・電話での相談
- ハローワーク岡山での就業相談 毎週木曜日(13:00~16:00)
- 岡山県各地域での出張就業相談・看護技術講習会

看護職の離職時の届出【届出サイト「とどけるん」】

免許取得後すぐに就職しない時、病院などを退職した時は、ナースセンターに届出(登録)をしましよ
う。(再)就職に向けて役立つ情報が得られます。

*2015年10月からは、法律により届出が努力義務化されました。

看護師等の届出サイト

とどけるん



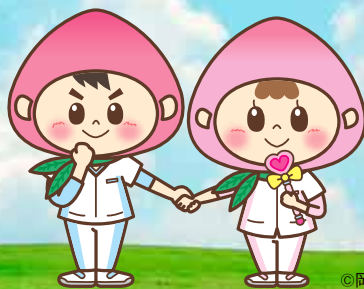
看護職のお仕事探し【eナースセンター(無料職業紹介サイト)】

ナースセンターが運営する無料の求職・求人サイトです。ご登録いただくと、お仕事探しや、人材探し
が可能になるほか、看護に関する情報が無料で得られます。

登録は次のいずれかで

- インターネット
 - パソコンから → <https://www.nurse-center.net/nccs/>
 - スマートフォンから → 右記QRコード
- ナースセンターへ来所
- 電話で申し込み TEL.086-226-3639





©岡山県看護協会「かngo君・ナースちゃん」

「介護福祉施設で働く看護職のエピソード」集を岡山県看護協会ホームページに掲載いたします。利用者さんとの関わりの中で、看護のやりがい・感動したこと・笑顔になれたこと等、心に残るエピソードを掲載いたしております。お楽しみください。また、冊子をご入用の方は、岡山県ナースセンターへご連絡ください。



発行年月日/2019.3.

発行元/(公社)岡山県看護協会 岡山県ナースセンター